

白川静のことば

《32》



金子都美絵・画

農耕儀礼には歌舞を伴うことも多いものであるが、そのなごりは、おそらく年や委という字形のうちに残しているよう。年は『説文』（七上）に「穀熟するなり。禾に従ひ、千の聲なり」とあり、千の形声字と解されているが、甲骨文にみえる数百の字形のうち、下部を千の形に作るものは一例もなく、金文においても、列国期に至って、はじめて下部に装飾的に肥点を加える字形がみえる。

く中略くしかしこの字形は、おそらく稲魂いなたまに扮した人の舞う形を示したものであると思う。それはこれと同じ造字法をとる委が、下部を女にしており、この年と委とは、字の構造において相対しており、字義においても相対するところがあると思われるからである。

くくく中略くく農耕の儀礼は、大地の生産力を刺激するという意味で、性的な模倣所作を多く伴うものであり、わが国にもなおかなりの遺存をみることができ、それは稲作地帯にひろく行なわれているもので、たとえば宇野円空氏の『マライシアに於ける稲米儀礼』（昭和十六年、東洋文庫論叢）などに、多くの事例が報告されている。それはおそらく古い時代の遺習が、なおいまに残しているものであるが、そのことを古代文字の構造によって考えると、「依たる士」は年、「媚たる婦」は委、いずれも稲魂を載いて性的舞踏を行なう男女の姿を示すものである。

『中国古代の民俗』講談社学術文庫 p156～198)